HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子ども臨床研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 7, 94-95
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58525
Type	other
File Information	AA12203623_7_94-95.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

子ども臨床研究部門

子ども臨床研究部門では、学内外の研究者及び実践家向けの発達障害の臨床に関するセミナーを９回おこなった。また、臨床研究及び臨床実践活動として、室橋・岩田を中心としてディスレクシア相談を、岡田を中心として造形グループ活動を行った。下記にその概要を報告する。

１．発達障害臨床セミナーの開催

「発達障害臨床セミナー」を「S.E.N.S 北海道支部」及び「発達障がい支援センターおがる」と共催で行った。場所は、北海道大学文系共同教育研究棟の教室。

第１回　７月 12 日（土）　14：00〜15：00
「WISC-Ⅳ及び心理アセスメントのかかわる倫理」講師：岡田智（教育学研究院）
参加人数：約 30 名
第２回　７月 19 日（土）　15：00〜16：00
「WISC-Ⅳを通した事例検討会」事例提供者：田邊李江・長内綾子（教育学院）
参加人数：約 30 名
第３回　10 月 18 日（土）　14：00〜15：00
「WISC-Ⅳ指標得点の解釈」講師：岡田智
参加人数：約 25 名
第４回　10 月 18 日（土）　15：00〜17：00
「WISC-Ⅳを通した事例検討会」事例提供者：山下公司（北九条小学校、教育学院）
参加人数：約 25 名
第５回　11 月 16 日（日）　10：00〜12：00
「LD 教育のこれまでとこれから」講師：上野一彦（東京学芸大学名誉教授）
参加人数：約 100 名
第６回　１月 31 日（土）　14：00〜15：00
「WISC-Ⅳによる認知特性に応じた指導実践」講師：桂野文良（京極小学校）
参加人数：約 20 名
第７回　１月 31 日（土）　15：00〜17：00
「WISC-Ⅳを通した事例検討会」講師：釣部幸（羊蹄山ろく発達支援センター）
参加人数：約 30 名
第８回　２月 21 日（土）　14：00〜15：00
「WISC-Ⅳを中心とした心理アセスメントレポート」講師：岡田智
参加人数：約 60 名（予定）
第９回　２月 21 日（土）　15：00〜17：00
「WISC-Ⅳを通した事例検討会」　事例提供者：西尾美里（札幌市自閉症・発達障がい支援センター　おがる）　参加人数：約 60 名（予定）

２．NPO 法人北海道学習障害児・者親の会クローバーとの共催シンポジウム

教育学研究院は北海道学習障害児・者親の会クローバーと連携協定を結んでおり、クローバーのアンケート実施を受けて下記のシンポジウムを開催した。当日は約 50 名の参加があり、熱心に聴講された。親の会クローバーからのアンケート結果報告のあと、教育学研究院の５名の教員からコメントをいただいた。親の会の皆さんにとっても、また研究院の教員にとっても相互に学び合う機会となった。なお、このシンポジウムの様子と内容に関して、北海道新聞と毎日新聞がそれぞれ関連記事を掲載した。

テーマ　「発達障がいのある青年の親として不安に思うこの先のこと：親なき後の心配に関するアンケート調査の結果から」
日時　2014 年７月 20 日（日）
　　午後１時 30 分〜午後４時 30 分
場所　北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）W 203
司会　室橋春光（教育学研究院特任教授、子ども発達臨床研究センター・センター長）
第一部　学習障害児・者の親の会が取り組んできたこと

①クローバーの取り組みについて：永瀬次郎（NPO 法人・北海道学習障害児・者親の会　クローバー　理事長）
②親なき後の心配に関するアンケート結果について：長田じゅん子（NPO 法人･北海道学習障害児・者親の会　クローバー　事務局長）
第二部　アンケート結果について考える
①児童福祉の視点から：教育学研究院教授・松本伊智朗
②社会教育の視点から：教育学研究院教授・宮﨑隆志
③家族福祉の視点から：北星学園大短大部教授・藤原里佐
④教育福祉の視点から：教育学研究院助教・鳥山まどか
⑤特別支援教育の視点から：教育学研究院准教授・岡田　智

3．ディスレクシア相談

ディスレクシア相談では、読み書き困難を主訴とする児童・青年に対して心理学的諸検査を実施し、その結果に基づいた心理・教育的な改善方法を提案・実施し、その効果を分析する試みを行っている。今年度は、医療機関等より紹介を受けた児童･青年 15 名について、音韻処理、視覚情報の想起と構成などに関する認知心理学的検査、眼球運動検査等の心理生理学的検査を実施した。そして、検査結果に基づく援助方法を検討して保護者あるいは本人に提案を行った。具体的な活動については、本号掲載の岩田らの論文を参照していただきたい。今年度の検査ならびに指導回数（2 月まで）は計 80 回であった。

4．発達障害の子どもの造形活動を中心としたグループ活動

2013 年度は月 1 回の造形活動を中心としたプログラムを展開したが、2014 年度は夏の 3 日間の集中プログラムを行った。札幌市やその近郊の小学校 1 年生から中学校 2 年生までの発達障害またはそれに類する困難のある 8 名の児童・生徒、また学部生 3 名、大学院生 4 名が 3 日間の活動に参加した（午前･お昼･午後の 3 セッション× 3 日＝ 9 回）。6 月に顔合わせプログラム 1 回、9 月にフォローアッププログラム 1 回も実施し、これら 11 回の活動を通して、自己表現力や仲間関係形成力、ソーシャルスキルの向上を狙った。子どもたちが参加した本活動は、合計で約 24 時間であった。それ以外に、学生・院生はケースカンファレンス及び活動準備、スーパービジョン（sv 岡田）では約 36 時間を費やし、これらの時間は、発達障害援助実習及び臨床心理実習の授業の一部に位置づけられた。